

# 指扇小だより

教育目標 **やり抜く子の育成**

かしこく やさしく たくましく あたたかく

令和8年5月29日 第3号

さいたま市立指扇小学校

〒331-0078

さいたま市西区西大宮1丁目49-6

電話 048-623-0133 FAX 048-624-2200

<https://sashiogi-e.saitama-city.ed.jp>

## 未来への余白

校長 小松 伸弘

暑さと寒さが交互に訪れるこの季節、子どもたちの表情にも少し疲れが見えています。

さて、先月の学校だよりでは「子ども同士の距離感」について話しました。関係が近づくからこそ衝突が生まれ、その経験を通して、子どもたちは自分と相手との間にある「見えない線」を学んでいくという内容でした。この話の延長線上にあるのが、「いじめ」の問題です。

近年、「いじめが深刻化している」という記事を目にします。ここでよく同時に取り上げられるのが「認知件数過去最多」という言葉ですが、私はこの言説に微かな違和感を覚えます。

現行の「いじめ防止対策推進法」では、いじめを「児童等が心身の苦痛を感じているもの」と定義しています。相手の悪意の有無に関わらず、本人が心身の苦痛を感じていることを重視するのです。さらに現在、学校はこの定義に基づき、小さな段階から積極的にいじめとして認知するようになりました。そのためか、令和6年度の文科省の調査によると、いじめが最も多かったのは小学校2年生で、その内容の多くは「冷やかしかからかい」です。この中には、先月紹介した人間関係の未熟さによるすれ違いも多く含まれているのではないかと推察します。

認知件数の増加は、いじめを見過ごさない意識の表れでもあります。私たちが子どもの時には見過ごされた事案も、今はいじめとして認知されているのです。従って「深刻化」という内容に「認知件数過去最多」を含めることには、もう少し慎重になってほしいと感じます。

一方で、SNSをきっかけとしたトラブルが増えていることも事実です。これについては、学校の関係が家庭に持ち込まれていることも一因ではないかと考えています。

かつては、学校で友だちと喧嘩をしても、家に帰れば関係が切り替わりました。しかし今はSNS等によって、家でも友だちとつながり続けることができます。友だち関係は楽しい反面、気遣いも必要です。学校の関係が入り込むことで、本来は心を休める場所であるはずの家庭でも、安心して過ごせる時間が減っているのではないかと危惧しています。

こうした問題に共通しているのは、子どもたちによる線引きが難しくなっているという社会の現実です。だからこそ学校では、普段から相手の気持ちを思いやることの大切さ、自分の気持ちを伝えることの大切さを繰り返し説いています。そしてトラブルが起きた際には、双方から丁寧に話を聴きながら、新たな線を引き直せるように支援をしているのです。

今後もいじめの認知件数は減らないかもしれません。それでも、小さな衝突の段階で相手の気持ちに気づき、線を引き直す力が育てば、深刻な被害を防げるのではないかと思います。さらに理想を言えば、子どもたちには経験を通して学び、変われる力があります。やり直す機会、即ち未来への余白を残すことが、よりよい社会の形成につながると信じたいところです。

もちろん、傷ついた子の安全・安心は最優先に考えなければいけませんし、悪質ないじめには毅然と対応してまいります。また、事案が子どもに深刻な影響を及ぼす可能性があるかと判断した場合は、関係機関との連携も視野に入れて動いてまいります。

6月は「いじめ撲滅強化月間」です。御家庭でも友だちとの関わり方について話題にしていただければ幸いです。お子さんのことで気になることがありましたら、遠慮なく御相談ください。